$10 A FIFTH. PRICES MAY VARY ACCORDING TO STATE AND LOCAL TAXES. 12 YEAR OLD BLEND

ワンダー植草・甚三ランド

晶文社

ワンダー植草（うえくさ）・甚一（じんいち）ランド

一九七一年一二月二五日初　版
一九八一年　六　月三〇日一六刷

著者　植草甚一
発行者　株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二-一-一二
電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）
振替東京六-六二七九九
壮光舎印刷・美行製本

© 1971 Jinichi Uekusa
本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

和田誠氏に

ジョン・レノンの残酷物語 6

CINEMA ROCK MYSTERY STROLL JAZZ HUMOUR DRUG PORNOGRAPHY LITERATURE THEATRE 12

雑学でサラリーをもらっていた男 46

ジャズの音はどんどん若くなってゆくんだなあ 54

ジャズの歴史を覗いてみると…… 58

ぼくたちにはミンガスが必要なんだ 61

ニュー・ロックの真実の世界が覗いてみたい 65

ジャニス・ジョプリンの死とロックの未来 81

頓珍漢のギャンブル入門 85

江戸川乱歩と私 88

かわいそうなアメリカの高校生と勇敢なイギリスの男爵夫人 90

映画『書を捨てよ街へ出よう』を分析する 96

植草甚一の生活と意見

まず簡単に自己紹介をしておきますと…… 160

カチューシャのドンドン焼き 161

ぼくの大学 163

ぼくの最初のコラージュ 164

丸木砂土のこと 165

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

サスペンス映画作法 102
グレアム・グリーン断章 106
なぜ十九世紀アメリカ文学が読みたくなるのだろう 110
こうとうがく・にゅうもん 129
グリーティング・カードのユーモア 133
プロ・ボクシング廃止論は正しいか 137
チャールス・シュルツの日常生活 141
ぼくのファッション・ノート 145
150
水道はすべて古屋に通ず 152
ウォルター・ウィラルの問題 156
そのときになってからではもう遅い 166
ゲームの規則 168
風呂はムシ風呂 169
ゲイ・ボーイ・コンテスト 173
わが糖尿病記 175
ある休日 177
新しいもの珍らしいもの 179
バスと陸橋 181

日録 184
六本木界隈と新宿界隈 188
土曜の銀座と少女たち 190
新宿・ジャズ・若者 209

植草さんのこと

植草さんと古本屋を歩く　和田誠 216
植草さんは〝風〟みたいなんだ　日野皓正 218
ビッグ・ブックとスモール・ブック　飯島正 220
ある教祖　丸谷才一 222
植草さんのこと　淀川長治 224
五木寛之・中田耕治との雑談 226
あとがき 248
初出一覧 251

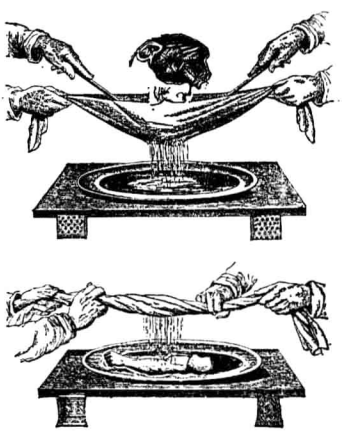
ワンダー植草・甚一ランド

ジョン・レノンの残酷物語

昔むかし、なんだったら三百年まえだったということにしようかな、遠くのほうの薄暗い森のなかに七人ばかりの小人と、せむしが暮していた。名前は、スリージー、グランプティ、スニーキー、ドッグ、スマーキー、アリス（たしかそうだった）、デリック、それからウィンピーといった。

ともかく、みんなは世界じゅうにないようなダイヤモンドの山を掘ってばかりいた。みんなは仕事がすんで帰ってくると、きまって毎晩のように炭坑夫がうたう歌をうたった。「やれやれ、これで仕事も終ったなあ。さあ、帰ることにしようや」といった調子の、たわいもない歌だったが、きっと帰ったあとで、なにかちょっとした台所仕事などがあるんだろう。

ところが、ある日のこと、六時ごろだったが仕事をおえて帰ってくると、グランプティのベッドに、「いびき」の白雪ねえちゃんがグーグー寝ていた。それを見たグランプティは怒りだしはしなかったが、薄ブルーのセーターを着ていたウィンピー



が、「誰かが雑炊を食べちゃった」と大声でわめいた。

ちょうど同じころあいに、すこし離れたところにある大きな城のなかで、一人の女が鏡を見ていると思ったら、急に「鏡さん、壁にかかった鏡さん、森の中の美人って誰のことなの」と詩にもならない言葉で叫んだ。すると鏡は「キャサンドルだよ」と答えてくれた。「それは大変だわ」と女王のようにも魔女のようにもドングリのようにも見える女は、ブルブルと顫えた。

「おとうさん、また鏡にむかって、おかあさんが何だかいっているよ」と、クラドックの娘がいった。おとうさんのクラドックは、読んでいた本から、ゆっくり眼をうつすと、おかあさんの年ごろになると、そういう病気にかかるもんなんだよ、と娘に説明してやった。

「なんだか気持がわるいな」と娘がいうので、また本を読む邪魔をされたおとうさんは、「気にしないほうがいいんだよ」といったかと思うと、読みかけていた大きな本に火をつけた。「こんな本なんか読んだってつまらない。本なんか読むのは飽きあきしたよ」

場面は突如として七人ばかりの小人の家に戻る。「いびき」の白雪ねえちゃんは、テーブルからコボれたものを掃きすてたりするし、ともかく用事をいろいろと片づけてくれるので、とても重宝だということになった。

「白雪ねえちゃんは、いいねえ」「ほんとうにすきになっちゃった」と小人たちが口をそろえていうと、白雪ねえちゃんのほうでも「あたしも、みんながすきだわ」といってニコニコするのだった。

そのとき耳に入ったのが林檎売りの声で、さっきから大声で叫んでいたらしい。「あたらしい林檎は、からだの薬だよ」とか「ためしに買ってくださいよ」とかいっている。グランプティが立ちあがって窓のそばに近づき「なぜなんだい」と怒鳴り返したので、みんなが驚いて彼のほうを見た。

ところが三日ばかりたって、その林檎売りが、またやってきた。「この林檎は、どうしても買ってもらわなくちゃ」といっ

て、まえよりもしつこい。「いびき」の白雪ねえちゃんは、その暗示にかかったのか、窓から顔を突きだした。そして一個だけ買ってやったのだが、その林檎には毒が注入してあった。林檎売りは、変装したお城の女王だったが、彼女は、おなかの皮がさけるくらい笑いながら丘のうえにある城へ帰っていった。

いっぽうクラドックの娘というのは、実をあかすとハンサムな王子だったのだ。彼は林檎を売った話を知ると、よこしまな女王を殺してしまい、鏡も叩き割ってしまった。それから七人ばかりいる小人の家をおとずれると、いっしょに暮す決心をした。けれど白雪ねえちゃんが結婚してくれというと、そいつはイヤだ、年をとりすぎているじゃないか、それに毒薬入りの林檎を食べたんだし、いつ死ぬかわからないんだからといって断った。

けれど二人は、いつのまにか妥協したのである。それがスリージー、グランプティ、スニーキー、ドッグ、スマーキー、アリス（たしかそうだった）、デリック、それからウィンピーには気に入らない。みんなは一緒になって二人を殺してしまい、あたらしい鏡も買わないことにした。

そのかわりに、いつも楽しそうな歌をうたい、死ぬまで仕合せに暮したというけれど、どっちみち誰かが誰かを殺したっていうことになるんだろう。

朝起きてみたら、フランクのからだに蠅がたかっていない。おや、これはどうしたことだろう？

彼は実直な市民であって、妻と子供が一人いた。その朝は、いつもとおなじように、セカセカしてたといったらいいかしらん、あわててバスルームにとびこむなり、体重ハカリに乗っかった。そうしたら大変、十二キロも急にふえているじゃないか！　そんな不思議なことがあるもんかと思うと、のぼせて顔がまっ赤になった。

「生まれたときから太ったことはないんだから、とても信じることはできないなあ。けれどハカリが狂ってるはずはない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そうだよ、おかあさん、あんたの暗い谷間から出てきたんだけれど、ずっと痩せっぽちだったから男らしい気がしたことはなかったんだ。それなのに、いったいなんでこんなに太ってしまったんだろうなあ」

もういちどフランクは、ぼんやりした目で、おっそろしく目方がついてしまった自分のからだを見た。「十二キロもふえていやがる。けれど兄貴のジョフリーときたら、もっと太っちょだったな。やつのおやじのアレックはケネスの息子だったが、おふくろはエリックとくっついておじさんのアーサーを生んだんだっけ」

フランクは、すっかり人間らしさをなくしてしまい、肩が重くてやりきれないなと思いながら、二階から下の部屋へ降りていったが、かわいそうな彼を見ても、ゆがんだ顔をした細君は笑い顔をみせなかった。いつもとちがって蠅がたかっていなかったからだろう。彼女は、まえに美人コンテストの女王にえらばれたことがあるんだが、彼を見ると変てこな顔をした。

「どこか痛いの、フランク?」と彼女は、ふくれっ面をふくらませて訊いた。「なさけなさそうな顔をしているわ。いつだってそうだけど」

「なんでもないんだけど、きのうの朝とちがって、急に十二キロもふえちゃったんだよ。だから人間ばなれがしてさ、情けなくなったんだ。よけいな口はきかないでくれないか。さもないと死ぬくらい痛い目にあわすぞ。ぼくは一人だけで苦しみに堪えるんだ」

「偉そうな口をきくのね、フランク。そんないいかたってあるのかしら。いったい何であたしが悪いことをしたの」

フランクは、悲しい顔をして細君を見た。ちょっとのあいだ、情けない気持も忘れていた。彼は、ゆっくりと細君に近づくと、頭をかかえて猛烈な力で二、三発ぶん殴ったので、放すと彼女は床にのびて死んでしまった。

「こんなぶざまな恰好を見せるにはしのびないから、それを思って殺してやったんだ」と彼はつぶやいた。「三十二歳の誕生日を迎えたおまえに、こんな太ったからだを見せることはできなかったんだ」

その日の朝食をフランクは自分でつくり、翌朝も、またつぎの朝も、おなじように自分でつくった。

二週めだったか、三週めだったかに、フランクは目をさまして気がついた。その朝も、やっぱり蠅がたかっていないのだ。

「おや、蠅がたかっていないな」と思った彼は不思議になった。ところがビックリしたことには、台所の床に死んだまんま転がっている細君が蠅だらけになっているではないか。

「こんなのを見ながらパンを食べることはできないな」と思いながら、独りごとをいった。「彼女の実家へ運んでやる義務がある。きっと彼女は歓迎されるだろう」

そこで麻袋を出したが、彼女は四フィート三インチしかなかったので、その袋のなかに、すっぽりと入ってしまった。それをかついで実家へむかい、むこうに着くとドアを叩いた。おふくろがドアをあけた。

「マリアンを連れてきましたよ、スザースキルさん」とフランクはいった。おかあさんとは、どうしてもいえなかったのだ。そうして袋の紐をほどくとマリアンを引っぱりだして、戸口に立てかけた。

「こんな蠅だらけなものを家に置くことはできないよ」と、自分の家が清潔なのを自慢にしていたスザースキル夫人が叫んだ。

「お茶ぐらい出してくれてもいいのに」と、死体を麻袋に入れたあとで、また肩にかつぎなおしたフランクは、口のなかでボソボソといった。

フランクは、テーブルを見たくはなかったのに、そのテーブルに目をむけてしまった。「なんて憎ったらしいテーブルなんだろう」と彼はいった。

「ぼくの家に、こんな老いぼれテーブルがあるなんて、いやになっちゃうなあ」そういったあとで時計を見た。

「あの時計だってそうだよ、ぼくの家にあるなんて癪にさわるんだ」そこはフランクの家だから、そういいたくもなるだろうなあ。

すこしたった。そのとき視線を投げたのは、彼の母親がいつもかけている椅子のところだった。「あの椅子がまた、すかないんだよ」とフランクはいった。

「見てごらん。よごれっぱなしで、とてもきたないシート・カバー。あんなものを我慢して見ていたら、それこそ奴隷みたいになっちゃうだろう。世界じゅうの人間が、ぼくを突っつきながら笑っているじゃないか。いったい、ぼくは、どうしたらいいんだい。ほんとうだよ。じぶんをギセイにしてさ、ねんがらねんじゅう拭き掃除ばかりしながら、このクソいまいましい老いぼれ家のめんどうをみなければならないというのかい」

フランクは老いぼれた母親にちかづいたところ「なんだい、おまえ、はきふるした自分の靴なんか見て笑っているなんて」と、まだ生きている彼女がいった。

「すみっこで見られたら頭にきちゃうよ」といったフランクは、背中をピンとさせて、母親の頭を蹴っとばした。

「笑ってくれたお礼だよ、この靴にしろ大きらいなんだ」といった彼はまた笑い声をたてた。

「この老いぼれ家を、ママといっしょに売っぱらうことにするからね」

それから売ってしまうと、イギリスをあとにして、ほかの国に住みついた。ところが懐かしい故郷にくらべると、半分も面白くないときている。年とって頭がイカレた母親をいなくさせてしまったのは凶作のせいだったけれど、やっぱりいいオフクロさんだったなあ。ものごとって、すべてこんなふうに、どうなるか判らないときてやがる。

CINEMA

ヒッチコック芸術

イギリスの批評家エリック・ロードが「ヒッチコック芸術」という論文をものしたが、こいつがイカすんだよ。ヒッチコックは、どうしても大人になれない。彼のスリラーは、みんな児童芸術だというのさ。

早い話が大当りした『鳥』だねえ。見ているあいだは、とても面白いけれど、あとで考えてみると、なんで鳥族が人間を突っつき殺しにやってきたのやら、そこがピンとこなくなってくるだろう。大人がつくったのなら、教訓をほのめかすにちがいないんだ。それがヒッチコックに出来ないのは、つまり子供だということになってくる。

この男の説によると、ティッピ・ヘドレンをグレース・ケリー型の冷たい感じの女にしたのは、そこをワザと鳥に突っつかせ、バケの皮をはいでやろうという子供っぽいイタズラ。スーザン・プレシェットは、眼つきがエリザベス・テイラーによく似ているので、アテツケに眼を突っつかせて殺しちゃったというんだが、こんなところも子供の復讐心に似ているそうなんだ。

だいたい子供は、見てはいけないものが見たくなる癖があるだろう。ヒッチコック映画の接吻場面は、なんだかこう、いつも子供が鍵穴から

ジーッとながいあいだ見ているようになっている。ところがそのあとでバカにするなと、またもや子供らしい復讐心にかられてさ、主人公は悪漢からヒドイ目にあわされるという段取りになるんだ。

それに彼は機械いじりがすきでねえ、『鳥』のラスト・シーンは特別な機械でもって三十二種類の画面を合成したんだといってゴキゲンになっている。それで海岸にあんなにたくさん集まったんだけど、気がついたかい、あのなかの一羽がクスッと気持のわるい笑いかたをしたことを。こんなところなんかも、最近の凝ったブリキ製オモチャをいじくって喜んでいるといった子供みたいなところがあると思うなあ。

けれど大人になれなくて、子供のまんまだからこそ、いい映画ができるってことにもなるねえ。

アンチ・スター

アンチ・ロマンというやつを書いて一流になった小説家もいるけれど、一流スターになったのに、たいして自分では喜んでないような顔をしている一派がある。こうした連中をアンチ・スターと呼ぶようになったが、そのひとりが日本でも人気の的になった『イタリア式離婚狂想曲』のマルチェロ・マストロヤンニだ。

あのポカーンとした表情は、サイレント初期のフランス喜劇役者マックス・ランデの顔つきとよく似ているから、これが原型だろうと思うが、ときどき頬っぺたの左をピクピクとひっつらせるあたり、だれだって嬉しくなっちゃう。マストロヤンニのやつ、味なまねをしやがるなあ。あれには苦心したにちがいないよ、と賞めるほうでもゴキゲンになっちゃうし、とにかくサカナにするには、もってこいの演技ぶりだった。

いったいだれのまねをしたんだろうと思っていたところ、こいつがいい。あの映画を監督したピエトロ・ジェルミと話しあっていると、頬っぺたの左をピクピクさせるというわけなんだ。

とにかくアメリカでの人気はたいしたもんで、日本では男たちが喜んでいるけど、あっちでは女たちがマストロヤンニに夢中になってしまった。いままでの出演映画は四十五本あるので、古ものを引っぱりだしてくると、こいつが結構うける。こうなるとハリウッドで引きぬきたくなるだろう。ところがマストロヤンニ

君、ぜんぜん英語に弱いときているのさ。

女のファンがふえたから、映画記者がローマまでネタとりに出掛け、婦人雑誌に売りこもうとするが、さっぱりいいネタがない。「仕事の合間には何をしますか」ときくと、「眠ってます」という返事。「監督になりたいと思いませんか」ときくと、「なりたくないですね」という返事だから、質問するほうで張りあいがなくなってしまう。

こんなわけでアンチ・スターといわれるようになったが、ファンのほうも変ってきたねえ。

グッド・オールド・デイズ

むかし、といっても大正の終りごろだが「良い映画を賞める会」というのがあってね、アッシはそのとき十五だったが、有楽町の鉄道協会の狭つくるしくて細ながい、いまでいうなら試写室みたいなところへ入っていった。やけに色男だった森岩雄がハカマをはいて一杯きげんで演壇にあらわれ「みんなが賞めるけれど、ぼくは感心しない。なんだこれは」といったかと思うと引っこんでしまった。するとこんどは夢声があらわれ「淫売窟へ男がやってくるが、あれはどうも探偵くさい。けれど普通の客かもしれない。いくら考えても分らなくなっちゃった」というので、こっちは狐につままれたようになった。この二人と『足ながおじさん』を『蚊とんぼスミス』という題で最初に訳した東健而が当時のウルサがただったけど、こんな前座のあとでガタガタと手廻し映写機がうごきはじめ、スクリーンにうつったのがジョゼフ・フォン・スタンバーグの、『サルベーション・ハンターズ』だった。ところでアッシは、このファースト・シーンをみた瞬間から映画ファンになっちゃったんだよ。まったく素晴らしかったなあ。見せてあげたいよ。プリントさえあればね。いちばん最初に河の水面に橋が逆さまにうつってて、右と左から逆さまに歩いて来た二人の男が橋のまんなかでブッかり何かやってる。すると水面にうつった影が急に揺れだし、スポッと空のウィスキー壜が浮びあがるんだよ。ここまでが、ワンショットときている。「良い映画を賞める会」では、ついで『嘆きのピエロ』や『キーン』や『恋の凱歌』を特別上映したけれど、このグッド・オールド・デイズを復活させようじゃないかということになった。それが四月からお目見得する『アート・シアター・ギルド』ってやつなんだけどいい映画をさがしだすだろう。待っててごらん。嘘はつかないっていってるから。

カメラと恐怖

イギリスの恐怖映画『血を吸うカメラ』を見たかい？　きみのような8ミリ狂が見たら唸っちゃうだろうなあ。カメラが主役みたいなもんで、たいていの場面にカメラが出てきてハラハラさせるんだ。ちょっと真似がしたくなるところがあるけれど、まあ我慢しときたまえ。原題は「ピーピング・トム」といって、つまり日本のデバカメみたいな変態性欲者が16ミリ狂でもあり、それが完全犯罪をやっていく物語なんだけど、最初この男の眼がスクリーンいっぱいに写ったかとおもうと、こんどはカメラのファインダーから覗いたロンドンの街の景色になって、ひとりの淫売婦のあとを追いかけていく。このあたりヒッチコックが有名になりだしたころのサスペンスの出しかたに似ていて凄くイカすんだ。

監督は『赤い靴』『ホフマン物語』などのマイケル・パウェルだけど、この監督が来訪したときだった。あなたの映画にはサディズム的なところがあると正直にいったところ、そんな失礼な言葉を口にするもんじゃないよ、と傍にいた偉い人にたしなめられたことがある。けれど、これを見ると矢張りサディストにちがいない。

ある心理学者がいて、恐怖研究のため息子を実験台にし、愕かしたときの表情を8ミリで撮っていた。このフィルムを息子が映写してみせるところがあるが、サディストの心理学者に扮して二度出てくるのが、マイケル・パウェル自身なんだよ。こんなところもヒッチコックはだしだなあ。こうして息子はカメラ狂になり、ヌード写真で稼いだりしている一方、おそろしい記録映画を秘密製作しているんだ。おやじの遺伝なんだねえ、三脚に忍ばした短剣のさきで狙った女の喉ぶえを突きさしながら断末魔の表情を撮してコレクションしているんだから、真似したくても出来ないだろう。血が出る場面など一個所もないのに、それ以上ゾーッとするよ。いままで恐怖映画にもいろいろあったけど、ひさしぶりに感心したなあ。

ROCK

ロックのフィーリング

ちょっと信じられないことだが、こないだアメリカの雑誌を読んでいるときだった。むこうの大学生でも最近流行のニュー・ロックというものが、ほんとうには理解できないでいる。どこがいいんだろう、教えてくれないか、という者が多い。そこを突っこんで報告している記事であったが、そういった学生がコンプレックスにおちいるのは、よい演奏だか、よくない演奏だか、それを聴いたとき判断できなくなってしまうからである。

いま日本は、ジャズのレコードとロックのレコードが毎月たくさん発売されることで世界一になっている。たとえば、もうしきフランスのBYGレコードが十枚いちどきに発売されるが、これなどはアメリカでもまだ出せないでいる毛色のかわったところだ。外国のジャズ・ファンやロック・ファンにとってヨダレがたれそうなレコードが、いくらでも簡単に手に入れることができるようになった。

それだけにまた、ほんとうにいいレコードをえらんで買うのがむずかしくなってくる。クラシックとちがってキメ手になる批評基準がないからだ。

そのいい例は最近発売されたマイルス・デイビスの「ビッチズ・ブルー」という二枚セットだろう。ここ当分これよりすばらしい演奏は聴かれないと思うくらいの出来ばえなのである。けれどそのよさを、いままでの批評基準で褒めようとしても、かんじんのところが、うまく説明できないようになっている。

そんなことを考えると、いろいろと話題になっている映画「ウッドストック」を思いださないではいられなくなる。あれは無造作に撮影された場面を二つ並べたり、ステージで歌っているところは三つに組合せたりし、そういう編集上の器用さで三時間も退屈させなかった。けれど猛烈にヴォリュームをあげたサウンドのため、頭はクタクタにさせられてしまう。それと同時に、四十万人もあつまった光景を見ていると、若いエネルギーのなかに巻きこまれてしまうのであった。ふだんロック・ミュージックになじんでいる人と、あまり聴いてない人とでは、この巻きこまれかたで大きな違いができてくるだろう。

じつは「ウッドストック」の実況録音レコードが三枚セットで発売されたので聴いてみたところ、映画にはなかったものがある。これこそレコードの世界なんだ、と思ったが、ちょっと説明をくわえると、映画のほうでは音はすごく拡大しているので、歌手の声も人間ばなれがしてしまい、それで分裂した人間であるようにも見えたのだった。けれど部屋のなかで「ウッドストック」のレコードを聴いていると、そんなことはない。もっとずっと親しみをもって彼らの歌は訴えてくるのである。

アメリカのロック・ファンは、日本の若い人たちとおんなじで、レコードでもって、いろいろなロック・グループにたいする好き嫌いができてくる。ところが、すきなグループがナマ演奏をやっているので聴きにいってみると、レコードよりも下手くそなのでガッカリしてしまうことがあるそうだ。

最近のレコーディングはエレクトロニック処理で、いくらでも音質の処理ができるし、歌やギターやドラムスの欠点をカヴァーしてしまうので、そういうことになってくる。虚像だといっていい。

話はかわるが、最近発売されたロック・レコードでは「ブラッド・スウェット・アンド・ティアーズ・3」(「血と汗と涙」というグループの三枚めのレコード)が、とっても面白かった。

ふつうジャズ・ファンはロックのビートやサウンドがきらいだが、このグループは以前からトランペットやサキソフォーンなどを使って、ジャズ的なロック演奏をやっているので、なかなかいいというジャズ・ファンが多いのである。こんどのレコードを聴いてみると、おなじような行きかただが、ずっとうまくなっているので感心した。

こんな話をしていたらキリがないが、だいたいロックは若い人たちを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com